論文の内容の要旨

論文題目
自傷行為をする生徒への学校での対応の在り方
—援助者と自傷行為経験者の視点をつなぐ—

氏　名　　坂口由佳

本論文では，中学生・高校生にみられる自傷行為に焦点を当て，自傷行為をする生徒たちに対して，学校では援助者がどのように関わっているか，また，どのような対応が望まれているかを明らかにするとともに，彼らの対応に際して，学校の体制はどうあるべきかを検討した。

自傷行為は中学生・高校生に多くみられ，彼らへの対応は喫緊の課題である。対応において重要な役割を担う学校では，援助者となる教職員たち（教師，養護教諭，SC ら）が自傷行為をする生徒への直接の対応を行うのに加えて，関係者・関係機関との連携を行っている。教職員たちは対応や連携にあたって多くの困難を抱きうるが，個々の経験に即した問題の現れ方，また，その対処法についての具体的な知見は十分ではない。さらに，自傷行為をする生徒側の視点と体験の理解は，対応の在り方を考える一助となるものの，その理解も進んでいない。そこで本論文では，教職員たちの視点からの研究（第 2 部）と，自傷行為経験者の視点からの研究（第 3 部）をそれぞれ実施し，総合考察で双方を組み合わせる（第 4 部）アプローチをとった。

第 1 部　自傷行為をとりまく現状と課題

はじめに，先行研究の整理を行い，まずは「自傷行為」の定義とその変遷，自傷行為の現状や実態の把握を試みた。続いて，中学生・高校生の自傷行為に焦点を当てる意義，学校での対応およびそれに伴う困難について整理した。最後に，それらを踏まえた課題と，本論文の目的，構成を提示した。

第 2 部　自傷行為をする生徒に対して学校ではどのような対応が行われているか

研究 1　自傷行為に対する教職員の対応の実態と背景の把握

研究 1 として，中学校・高等学校の教師・養護教諭・SC を対象とした質問紙調査を行い，自傷行為に関する知識や認識，対応に伴う感情や抱える困難について，職種間や対応経験人数による違いがあるか調べた。得られた 319 名の回答傾向の違いを，教師群と養護 SC 群間，また，教師の対応経験人数で分析した。

その結果，養護 SC 群ほど，自傷行為を自分の気持ちをコントロールする方法として捉えている傾向があり，「驚く」「ショックに感じる」「恐ろしい」といった感情は教師ほど抱きやすいこと，さらに，対応経験が少ない教師ほど強く抱くことが示された。困難の感じ方にも両群間で違いが認められた。

職種間やこれまでの対応経験の多寡によって認識・感情面の違い，対応に伴う困難の違いが生じうることを考慮した上で，教職員同士で補い合うことがより良い連携の一助となると考察された。困難の軽減のためにも，専門家の存在や研修会の実施といったサポート体制を整えることが重要と考えられた。

研究 2　自傷行為をする生徒に対応する教師の関わりと体験の理解

研究 2 として，教師を対象とし，その体験の理解を試みた。半構造化インタビューを 7 名に実施し，グラウンデッド・セオリー・アプローチを援用して分析をした。

その結果，教師は，日ごろから生徒に声をかけたり話を聴くなどして関わりながらも，甘やかし・特別扱いをすることなく，厳しく接する面も持ち合わせており，一般的で日常的な「教師らしい」対応をしていた。生徒との関わりには，生徒の担任教師かどうかという立場の違いが意識されており，担任教師の場合には，生徒の学校生活の責任を負うことから厳しく接する場面も多くなるが，担任以外（同僚教師）の場合には生徒にとっても評価者であるという認識は薄れ，担任教師より近い距離感で接することができていた。このような同僚教師の存在や意義を担任教師も理解し，教師間で共有されていることが分かった。また，生徒と学校のつながりを保つことの重要性も意識されていた。教職員間で連携体制を構築し，複数人で生徒との関係性を保つことが重要で，教員間の密な連携と円滑な情報交換・共有が欠かせないが，連携に伴う様々な苦慮・困難も見出された。自傷行為特有の扱いづらさに加え，自分の役割に対する担任教師の気負いや，担任でないがゆえの同僚教師の遠慮といった立場に起因する意識が苦慮・困難と関わっていると考えられた。

教師たちが互いの立場や役割を理解すること，対応の仕方や方向性についての認識を共有することが連携にとって重要で，自傷への抵抗感を減じるには自傷行為の理解を深めることが重要だと考えられた。

研究 3　自傷行為をする生徒に対応する養護教諭の関わりと体験の理解

研究 3 として，養護教諭を対象とし，その体験の理解を試みた。半構造化インタビューを 11 名に実施し，グラウンデッド・セオリー・アプローチを援用して分析した。

その結果，養護教諭は，自傷行為をする生徒を保健室で受け入れつつも，特別扱いしないよう一生徒としての指導・支援を行うという二面性の間でバランスをとって関わることが分かった。また，養護教諭自身が連携の中心となるチームを形成し，さらにチームを調整する役割も担うことが分かった。加えて，保護者や医療機関とつながる役割も担っていた。生徒のみならず，教師たち，保護者・医療機関への幅広い連携への志向があり，担う役割も多いことが養護教諭の特徴だった。その分，抱く苦慮・困難は多様で過大な負担となっていた。また，体験の中で自傷行為の認識が深まるほど苦慮も際立つこと，連携を目指しつつも期待通りできないという立場ゆえのジレンマがあることも分かった。

生徒と接する関係者を増やし，様々な関係を構築することが連携の上では重要で，その促進者となる養護教諭の負担軽減を図るための校内のサポート体制の必要性が示唆された。

第 3 部　自傷行為をする生徒にとって学校での対応はどのように体験されているか

研究 4　ブログからみる自傷行為経験者の体験

研究 4 では，学校での対応を自傷行為経験者の視点から理解するため，自傷行為経験者 14 名のブログを分析対象とし，学校の先生たちの対応に関する記事を抜粋した上で，グラウンデッド・セオリー・アプローチを援用して分析をした。

その結果，生徒たちの体験する対応は，自傷行為を手放していく方向へ進む《自傷行為をする生徒たちにとってサポートされたと感じる体験プロセス》と，生徒が心を閉ざし，先生たちとの関係を絶つようになる《自傷行為をする生徒たちにとって冷たく見放されたという形で体験がすすむプロセス》の主に 2 つに分けられた。体験によっては，サポートされたと感じる体験プロセスから冷たく見放されたと感じる体験プロセスへ移る場合もあり，2 つの体験プロセスの間に見出された「移行領域」を経るルートがあった。体験は揺れ，移行領域を行き来するが，先生の対応によっては容易に関係を切ってしまう実態が見出された。

生徒が援助ルートに乗るためには，先生たちの関係を構築・強化することが重要で，先生たちによるこまめな声かけなど日常的なサポートを継続的に行う必要があると考えられた。

研究 5　二種類の語りの比較からみる自傷行為者の体験－事例 C より

研究 6　二種類の語りの比較からみる自傷行為者の体験－事例 G より

研究 5・研究 6 として，研究 4 の対象者の中から特定の 1 名ずつを対象とした事例研究を展開した。自傷をしていた当時からのブログの記述に加えて，時間が経過してからのインタビューにより語りを引き出し，それらの比較によって，学校の対応や学校での体験が具体的にどう語られるか，また，語りがどのように揺れ，変容するか知り，学校における体験の特徴を把握することを目指した。

その結果，当時から時間を経たインタビューの語りには，複雑に絡み合う自身の体験の簡潔化，出来事に対する評価の変化，視点の広がりといった特徴が見出された。また，各々が捉える自傷行為の意味づけも見出された。こうした変化は，時間の経過や対話者の存在が影響していると考えられた。

自傷行為の体験，学校での対応の体験の語りには，先生たちからかけられた言葉など，当時から変化しないで彼らの中に強く残る部分があり，体験は後々にも消えずに彼らの人生に影響するとみられたことから，先生たちは対応するその場一時点の視点に加えて，長期の影響も念頭においた複眼的な視点をもって対応にあたることが重要だと考えられた。

第 4 部　総合考察

6 つの研究の知見をまとめ，そこから見出される，自傷行為をする生徒への学校における対応の在り方について考察を展開した。本論文では，これまで十分ではなかった職種間での対応の実態を浮き彫りにするとともに，生徒の視点からの評価も新たに加えられた。

それにより，まず，生徒への対応においては，関係づくり，関係の維持，関係の深まりという 3 段階があり，とくに学校現場では関係づくりが要であると示した。対応の際には，自傷そのものへの対応だけでなく，自傷行為の根本へと踏み入れるよう，その外堀を埋めていく対応，すなわち生徒との関係づくり，維持が求められる。このような対応の在り方は，自傷行為の特殊性としてまとめられるだろう。

また，教職員間でつながり，チームで生徒への対応にあたるだけではなく，教職員間での情報共有や連携に努めることが重要である。そのためには，情報共有・交換の場や時間を設けるというハード面の整備だけではなく，援助者同士が率直に気持ちを吐露し共有し，支え合えるようなソフト面の整備も大事であると考えられた。とくにチーム内では養護教諭が中心的役割を担うことが多く，過大な負担を抱えているため，養護教諭の負担軽減となるような体制づくりや，養護教諭をサポートする SC の存在が有益になると考えられた。さらに，SC の専門性を十分に発揮することで，チームの機能やチーム内のサポート体制がより強化されると考えられた。最後に，多様な職種がそれぞれの専門性をもって柔軟に関わるチーム対応が望ましいのではないかと考察した。